

A-52 唾液中のαミラーゼ活性の変動におよぼす食生活の影響  
昭和女大短大 ○田中伸子 岡村浩

目的 従来、唾液中のαミラーゼについては酵素学的、生理学的研究がなされているが、食生活との関連性についての報告はほとんどない。そこで我々はこの食生活に注目し唾液中αミラーゼ活性との相関性につき検討を加えた。

方法 唾液は一定時間内で自然に口腔内に流出したものを採取し、よく攪拌し希釈して用いた。αミラーゼ活性の測定法は次の二方法を併用した。多人数の標本を一度に測定する場合には、操作が簡単なWilks titler法、その他の場合には唾液の使用量が少ないD-nitrosalicylic acid法を用いた。

結果 唾液中αミラーゼの活性は個人差が大きいこと、同一人において起床時最も活性が低いことは先に報告した。そこで今回は個人差が最も明確に示される時点として起床時を選び、324名の女子大生を対象に活性を測定したところ、平均値278  $\mu\text{mol saliv}$  が得られた。同時に食生活について2.3質問した結果、食物を口に含んで飲み込むまでの咀嚼回数が多い者の方が、少ない者より活性が高いことが認められた。また、日本茶およびコーヒーを好む者の方が活性は低い傾向がみられた。そこで咀嚼、および日本茶などの嗜好品がαミラーゼ活性の変動にどのような影響を与えるのか検討を加えた。咀嚼く時間を変化させその後15分毎に活性を測定したところ、咀嚼くという刺激により活性はただちに上昇するがその度合は個人差があり、咀嚼く終了とともに再びもとの活性値付近にもどることがわかった。また、紅茶、コーヒーは添加量の増加とともに活性は減少するが、日本茶はその割合が小さかった。